

行くだけじゃ面白くない!

大人の 「ひねり旅」 指南



第5回

改めて「考える」「感じる」
「知る」…。人生観を変えて
しまうかもしれない旅

DiThi (ディシー) 代表
観光ホスピタリティコンサルタント

石田 宜久

URL <http://www.dithi.net>

E-mail info.contact@dithi.net

誰かが言った。「旅をした者は長生きした者より多くを知る」と。旅は人を成長させる。あっ成長し過ぎた。いい大人ですから…。

これはANACカードのCMフレーズですが、著者は妙にこの言葉に魅力を感じるのです。他にも、「かわいい子には旅をさせろ」「旅は道連れ、世は情け」など、旅に関係する名言がいくつもあります。旅には、人を惹き付ける何かがあると思いませんか?

日常生活では、体験や学ぶことが出来ない事柄も旅をすること

で、自分の環境外の「智」に出合えることが出来ます。これは歴史上に名を残し、偉業を成し遂げた偉人たちにも共通した概念です。今回は、そんな「人生観を変えてしまふのかもしれない旅」をテーマに話を進めてみましょう。

ミステリーの主人公
自分のルーツを辿る旅

家系図をご覧になったことがありませんか? 或いは作ってみたいと思っただけではありませんか? 昨

今、この家系図の制作を希望する人が急増しているそうです。

これは、自然災害の多い日本の環境下において、東日本大震災をきっかけに、自分の家族とその祖先のことをしっかりと把握しておきたいという心情が強まったのだと言われています。確かに自分のご先祖様たちが、「いつ頃」「何所で」「何をしていた」のかは、とても気になるところで好奇心を掻き立てられます。中には、行政書士の資格を取得して古い戸籍を遡る強者もいるようです。

これまでに、「旅の作り方」「長旅の方法」「移動旅の仕方」などを紹介してきましたが、今回は、これまでの技術を集結させて自分のルーツを知るための旅の実現を目指してみましよう。

とはいえ、どうしていいのかわからないはず。また、「遺伝子的には、全人類は7人の女性の子孫から広まった」などという、学術的(ミトコンドリア・イブⅡ)人類の進化に関する学説)な解説をするわけでもありませんし。

ちなみに著者自身の話をしますと、現在、観光コンサルタントとして仕事をしていますが、祖父の祖母まで辿ってみると、その昔は京都の呉服屋だったそうです。歴史的にも約100年は遡れるところで、ご先祖様は維新の時代の京都で生きていたことになります。私が今あることは、激動の時代を生き抜いてくれたご先祖様のおかげだと、初めて心から感謝の念を抱きました。

このルーツを辿る旅は、まずは戸籍を辿ることに始まりますが、今では難しい当時の文字で書かれた古い戸籍を読み解くケースもあり、それ自体がミステリアスで推理小説を体験しているかのような気分になります。

しかし、限界ともいえる高い壁があるのも事実です。世界に誇れる日本の戸籍制度ですが、今でこそ除籍簿の保存法定期間が150年と定められています。それが、最低80年という期間で、相当量の戸籍データが処分されてしまっているのです。

役所によっては、除籍簿を20年近く遡ることが可能なケースもあるそうですが、ほとんどの場合、ご先祖様の出身地にあるお寺の檀家帳の確認作業や、調査の途中で出会った本家筋に記録を見せてもらったり、墓石の記載を調べたりすることになります。

また、個人のプライバシーの壁などの問題もあります。除籍簿とはいえ、簡単には見せてくれません。しかし、これらの高い壁を乗り越えて実際に各地へ赴き、時代と空間を越えてのご先祖様探しは、一般的な旅と比較しても、楽しさプラスαのアドベンチャー的な趣向が味わえます。

そして仮に、日本中を巡り転々と散らばったご先祖様たちであれば、それだけ広範囲にわたり思いがけない親戚や人々との出会いが待ち受けています。ご先祖様たちが身近に感じられるだけでなく、見知らぬ遠い土地の人々と、血のつながりがあると分かったとなれば、その感覚は他者にはわからない不思議なものとなります。

偉人たちの歩いた道 歴史を辿る旅

ルーツを辿る旅は自分自身のことでしたが、歴史上の人物の中には旅をすることで偉業を成し遂げた偉人もいます。そんな人物を真似て同じ道を行ってみると、あなたも違う世界を見ることが出来るかも知れません。

そんな歴史上の人物を辿る旅の定番中の定番といえば、やはり「松尾芭蕉・奥の細道」ではないでしょうか。ルートが明確で宿場町も整備され、由来したスポーツも数多くあるのでビギナーにも分かりやすいです。特に、重要ポイントには記念碑なども点在しており、観光的にも周りやすいルートです（左図参照）。



他、維新にテーマを絞れば有名どころとしての「新撰組」や「坂本龍馬」。世界にまで範囲を広げて「勝海舟」の渡米先を巡るというスケールの大きな旅のアイデアもあります。

また、日本地図を製作した「伊能忠敬」も静かなブームになっています。このように、様々な人物をモデルとした旅の設定が出来ます。まさしく、冒頭に書いた「旅をした者は多くを知る」という言葉は、確かなものではないでしょうか。

江戸を中心にルート設定すれば、東海道・中山道・甲州街道・日光街道・奥州街道の五街道は外せませんし、その枝道としての歴史的街道で今でも現存しているものもあります。そして、当然ですが当時の移動は基本徒歩でした。

そこで、現代の発展した交通網を駆使して鉄道や路線バスの利用と、徒歩を混ぜ合わせて巡る旅はどうでしょうか。例えば、今も五街道は、多くの車が往き来する現代社会の幹線道路ですが、実は、

かつてのルートとは違うのです。整備されていない旧道が各地に残されています。残念ながら宅地開発などで消滅してしまっている部分もありますが、残されている部分だけを歩いて、それ以外は車や公共の交通を利用して周ってみるのもいいでしょう。

往時の街道をしのび、その道を利用して人々の営みを感じてみる。その道は、歴史に残る偉人たちが歩いた道なのです。

地球を実感してみる ジオツーリズムの醍醐味

近年、日本では「エコツーリズム」や「グリーンツーリズム」と称して、自然を体感しエコ（環境や生態など）を学ぶ旅が盛んになってきました。ところが、観光の世界は進んでおり、ワールドな視点では「ジオツーリズム」が確立され始めています。

「ジオ(Geo)」。つまり「地球や大地のストーリー」を楽しむ旅のことです。単に景観や風景を楽しむ

究極のジオツーリズム!? 未来はあなたも…

地質調査研究員である、ジェフ・マックレイ、ブラッドリー・アンブローズ、ネイサン・ベルグは、溶岩が荒れ狂うパヌアツ、アンブリム火山の火口へ下りました。溶岩との距離約30m。消防用の呼吸器と耐熱スーツをまとい、火口間近で6秒間耐えることが出来たそうです。

もちろんこれは専門家で、溶岩の動きや流れを熟知した彼らだからこそできた荒行ですが、技術の発展が早いこの時代、もしかしたら一般人でもこのように溶岩に接近できる旅ツアーが出てくるかもしれません。



実際に、日本人でも初めて、ジャニーズのタッキーこと、滝沢秀明さんが番組内の企画で溶岩に接近したことがあります。もちろん専門家が同行はしていましたが、滝沢さん本人は一芸能人。一般人が体験できるのも遠い未来の話ではないかもしれません。

だけではなく、地球そのものの現象や学術的な地質や地形を学ぶのがジオツーリズムの目的です。

細分化すると、化石や岩石、鉱物、鉱石など、考古学、歴史学、地理学、科学の要素が含まれ、子供から大人までが対象の生涯学習を主題とした観光モデルとなっています。

世界的なスポットとしては、ア

メリカのグランドキャニオンがその一つです。長い年月をかけて風と水が形成したあの地形は、人の力では到底真似できないまさしく地球のいたずら。

そして、同じくアメリカ・ハワイ州のキラウエア火山は、経験豊富なパイロットが操縦するヘリコプターに搭乗し、ダイナミックな溶岩流や火口を間近で観察でき、

キラウエア火山を俯瞰するヘリコプターツアー

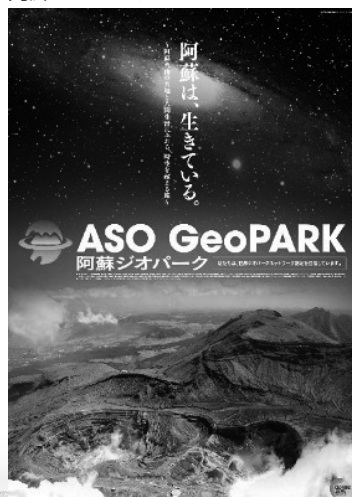


その溶岩が海へと流れ莫大な水蒸気を上げる光景を空から一望できるのは、世界でもここだけです。

ジオツーリズムは、まだ日本では乏しい観光分野であることは否めませんが、地理的な観点で見れば、我が国はまさしくジオを学ぶための宝庫といえます。

その限られた日本のジオツーリズムの中でも、著者のお薦めは、世界有数のカルデラ地形とその周辺の高原地帯を魅力とした「阿蘇ジオパーク」です。カルデラ地形、火山地形、草原が一体となって共存している自然風景は、貴重な体験が可能なエリアです。

阿蘇ジオパーク



残念ながら阿蘇ジオパークは、学術的（地学、科学など）な情報発信が不足気味で、あくまでも観光施設の一環となっています。とはいえ、ジオガイドと一緒に歩いて説明を聞いたり、季節ごとに異なるプランが用意されていたりと、これからの可能性を感じる日本のジオツーリズムスポットとなっています。

ノーチラス号の気分 謎が多い海の世界への旅

科学的に地球のことが解明されているのは、ほんの一部分に過ぎません。なぜならば、地球の表面積の7割は「海」だからです。

観光ホスピタリティコンサルタント石田が考える 実証済み! ジオツーリズム&リラックス詰め合わせ旅「北海道洞爺編」



ジオツーリズムに興味を持っていたけましたか。自然と直接対話の出来る旅は、少しワイルドすぎる印象を持たれた方もいるかもしれません。そこで、ジオツーリズムも豪華な旅と一緒に、しかも日本国内で楽しめるプランを紹介しましょう。それが「北海道洞爺」です。

洞爺駅から車やバスで、15分程度で行ける「有珠山」。2000年の噴火も記憶に新しい、まさに火山活動を今も続けている活火山です。まさに噴煙を上げているその姿は、「地球の息吹」を感じられること間違いありません。山頂まではロープウェイで登れますし、3つある展望台をすべて周ろうとすると、ちょっとしたトレッキングになります。山頂からは同じく火山で



ある「昭和新山」も眺望でき、四季折々で違う色の景色を眺められるのも素敵です。洞爺湖温泉街近くには「火山科学館」があり、歴史や噴火のメカニズムも学べます。

地球の力を存分に味わった後は、自分自身の活力を取り戻すべく、豪華にリラックスできる「ザ・ウィンザーホテル洞爺」での宿泊はいかがでしょう。世界的なホテル協会「リーディングホテルズ・オブ・ザ・ワールド」



に加盟し、2008年夏開催の第34回主要国首脳会議（サミット）において、首脳会議開催会場に利用されたホテルで快適な時間を過ごしてください。ホテル内にあるレストランは合わせて6つのミシュランの星を持ち、ホテル自体も最高ランクの「five-star」で、そのクオリティはお墨付きです。洞爺湖温泉のお湯に浸り、日常のストレスと疲れを癒し、心身ともに解放されること間違いなしです。

観光用潜水艦「アトランティス号」



世界で一番高い山・エベレストの標高は8千848メートルですが、海の最深部は北西太平洋マリアナ海溝の最深部、チャレンジャー海淵が1万920メートルです。実際、まだ発見されていない生物が山ほどいるといわれているのが海の世界なのです。知られていないことがたくさんある世界へ行ける。これほど魅力的なチャンスはありません。

深海体験というと、我が日本が誇る、深海探査潜水艦「しんかい6500」です。世界で2番目に深く潜れる潜水艦ですが、探査目的となると世界で唯一、6千メー

トル以上潜れる探査潜水艦とされています。

残念ながら「しんかい6500」は、私たち一般人が乗ることはできませんが、海底を観察できる潜水艦は他にもあります。有名なのはハワイの「アトランティス号」です。他にも、サイパンやグアムでも運行されています。深海ではありませんが、水面下30メートル程の海底世界を体験できます。世界的に見ても、潜水艦ツアーは数が少なく貴重な体験ができます。

話は変わりますが、著者はビギナーですがクライミング（岩壁登坂）を通じて、地球の大地と対話を試みています（まだまだ相手にもされないレベルですが）。本稿で紹介したように「旅」は、様々な学びやスポーツと密接に結び付き、地球上の歴史と文化がいま一つ人々に大きな感動を与えているのです。

次回は、さらなる冒険を求め、日常生活から離れて少しコアな世界を覗く旅を紹介します。